信濃川洪水絵巻

「暴れ川」信濃川

信濃川は367キロメートル、我が国最長の河である。流域面積も大で新潟・長野の両県を潤し、人々をはぐくみ育ててきた。信濃川は正に「母なる川」である。

しかし、ある時には一切のものを流し去り、破壊するきびしさを持つ「暴れ川」であった。毎年のように信濃川はどこかで水害を起こし、人々を塗炭の苦しみに陥れてきた「野生の川」であった。

「横田切口説(ぎれくどき)」に見る信濃川

明治29(1896)年7月21・22日は梅雨前線による豪雨のため信濃川がはんらんし、流域の人がひどい目にあった年である。大河津の最高水位14.98メートルという記録は、大正5年にもあるほか、昭和50年代まで敗られなかった。

この洪水の直後に「大洪水(おおみず)さわぎ実況くどき」という小冊子が発行されている。下流の人たちは「横田切口説(ぎれくどき)」と言って語り伝えている。読みやすく、ふしをつけて読むことができるので「口説(くどき)節(ぶし)」とも言われ、多くの人はこれを読んだり、聞いたりして水害の恐ろしさを知り涙を流した。

「横田切」というのは大河津分水の少し下流にある横田という地名からきている。新潟の地方では破堤個所の地名をつけて「〇〇切」といっているところがたくさんある。

横田という所は信濃川が扇状地的性格から三角州平野に移る変換点に位置し、流路が向きを変える屈折点にも当たっている。

洪水絵巻として残る

明治29年の大水害は有史以来のものであった。水害の惨状を永久に残すために、翌年、有名画家から描いてもらったのが「信濃川洪水絵巻」である。全部で12枚あり、縦44.5センチメートル、長さ8.37メートルのもので、展示の便から1枚ずつにしてある。そのうちの1枚が「横田切」の絵である。

1．横田破堤　第一図

この絵の右上には水害実況十二「西蒲原郡横田村堤防破壊県官出張所之現状」玉章の印がある。東京美術学校教授、文展審査員であった川端玉章の描いたものである。

絵の手前の方には蓑(みの)笠姿の10人ぐらいの人たちが見える。必死になって欠けた堤防の作業を行っている。粗朶(そだ)も見える。向こう側の突き出しの所には旗が見え人が見える。危険個所か本部を示すものであろう。草ぶきの小屋が3戸見えるが県の役人の指揮所である。現地対策本部である。向こうの小屋は資材の入った水防小屋であるかもしれない。荒れ狂って流れる濁流、降り注ぐ豪雨、まことに凄惨そのものである。西蒲原郡一帯はここから水びたしになったのである。現在、破堤個所には記念碑が建てられている。

2．土蔵流出　第二図

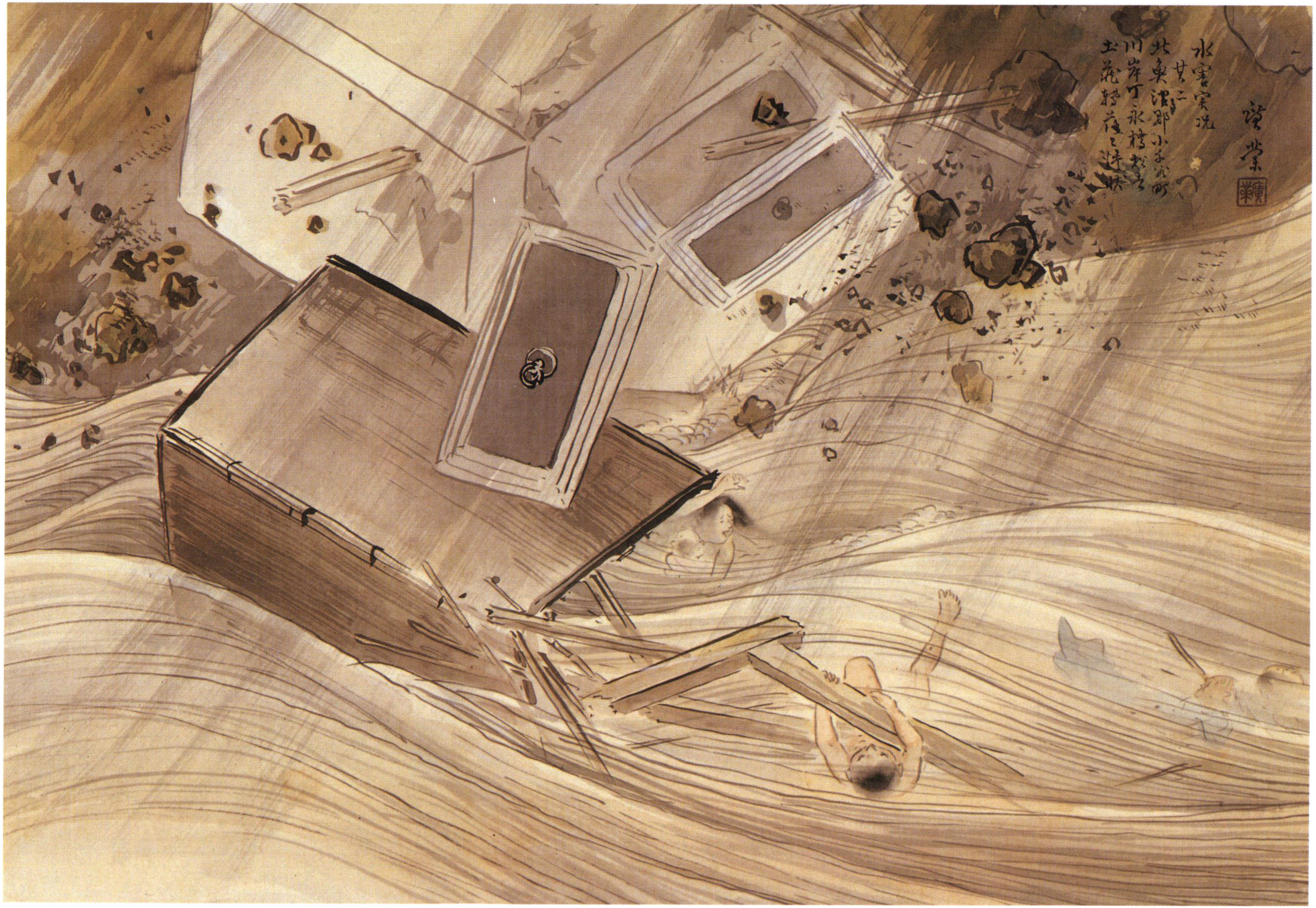
土蔵一つを取りあげて細部にわたって描写している。画家は寺崎広業である。彼も東京美術学校教授であり、文展審査員であった。

絵の右上に広業の印があり、水害実況其二「北魚沼郡小千谷町川岸丁土蔵転覆之惨状」と書かれている。土蔵というと土で塗り込めた防火の意味を持った建物である。ここでは水害で流されないためも考えて建てられたのでないかと思う。

信濃川の水が刻々と水かさを増し、重量物である土蔵までも流し去り、呑み尽くす大洪水であった。土蔵がさけ、飛び散る土塊、水害の恐ろしさを如実に描き現している。ひどかった明治29年の水害は、この意味から「横田切口説」となり、また「絵画」として記録され、大切に伝えられているのである。

郷土研究家／阿部　正

第一図　川端玉章筆「西蒲原郡横田村堤防破壊県官出張所之現状」



第二図　寺崎広業筆「北魚沼郡小千谷町川岸丁永橋松吉土蔵転覆之惨状」(新潟県美術博物館蔵、上図も同)